



牧野 健一郎氏に聞く

製鋼原料本部長補佐兼環境・
循環ビジネス推進部部長

エムエム建材は今年3月、NTTドコモビジネスとの協業による資源循環プラットフォーム「STELLAR HUB（ステラ・ハブ）」のサービスを開始した。建築解体で発生した鉄スクラップが建設用鋼材に再生され、新築案件に採用されるまでのデータを管理。第三者認証で資源循環の透明性と信頼性を高める仕組みとなっている。同システムの利用状況などについて、製鋼原料本部の牧野健一郎本部長補佐兼環境・循環ビジネス推進部部長に聞いた。

（小堀 智矢）

——まずは「STELLAR HUB」の概要を。

「建築物の解体で発生した鉄スクラップが棒鋼や形鋼などの建設用鋼材に再生される流れ、いわゆる水平リサイクルを“見える化”する仕組みだ。一つ一つのスクラップ自体をトレースするのはなく、量をデータとして管理する。解体由来の鉄スクラップがどの程度循環できたかを『資源循環率』として算出するほか、第三者認証機関による当システムに対する認証も取得しており、必要に応じて証明書を発行できる」

——システム利用を見込む顧客層とは。

「まずは建物の資源循環に主体的に取り組む施主や不動産開発業者（デベロッパー）が挙げられる。次いで、建物の解体から建築まで、担うゼネコンが『STELLAR HUB』の利用を優先に取り組んでいる。顧客から有益なシステムと認識する対象となる。そうした価値をデータで管理している。自社で発生したスクラップがどの程度循環できたかを『資源循環率』として算出するほか、第三者認証機関による当システムに対する認証も取得しており、必要に応じて証明書を発行できる」

——現在のシステム利用状況は。

「大手ゼネコンを含む複数の案件で利用が進んでおり、現在四つの案件でデータを運用している。数量のデータを扱うため、解体案件の一部だけを試験運用することも可能。当社が鉄スクラップと鋼材の商流に介入することが条件となるが、顧客の要望に応じて柔軟に運用できる点が『STELLAR HUB』の利点でもある」

解体由来の鉄スクラップ 環境価値をデータ管理 日本の産業強くする「土台」に

「新築案件にSTELLAR HUBを活用した鋼材の双方を取り扱う当社の特長が最大限に発揮できる仕組みでもある。ゆくゆくは他の産業分野にもフィードバックしたい。『見える化』から『価値化・標準化』へ進め、あらゆる資源循環をデータでつなぐプラットフォームを目指している」

「ISO規格（ISO22095）に基づき、モノ自体ではなく環境属性を分離して管理する『ブック＆クレア』知ってもらえるよう努めて『STELLAR HUB』『STELLAR HUB』

「ISO規格（ISO22095）に基づき、モノ自体ではなく環境属性を分離して管理する『ブック＆クレア』知ってもらえるよう努めて『STELLAR HUB』『STELLAR HUB』

「ISO規格（ISO22095）に基づき、モノ自体ではなく環境属性を分離して管理する『ブック＆クレア』知ってもらえるよう努めて『STELLAR HUB』『STELLAR HUB』



「ステラ・ハブ」の概念図

極めながら収益化を検討していく」

——システムの課題は。

「スクラップを回収・輸送する車両の配車最適化機能の追加は次のステップ。温室効果ガス（GHG）排出量の可視化やその他資材への対象拡大も含め、次期バージョンへの搭載を検討している」

——『STELLAR HUB』で目指すものは。

「『STELLAR HUB』は単なるシステムではなく、循環経済を構築するベースになると考えている。建設業や鉄鋼業といった日本の産業自体を強くすることが最大の狙いだ。また、鉄スクラップと建設用鋼材の双方を取り扱う当社の特長が最大限に発揮できる仕組みでもある。ゆくゆくは他の産業分野にもフィードバックしたい。『見える化』から『価値化・標準化』へ進め、あらゆる資源循環をデータでつなぐプラットフォームを目指している」